



[福岡県 大川ショールーム]

〒831-0016

福岡県大川市大字酒見201 KAGUHAUS 3F

[福岡県 柳川ショールーム]

〒832-0066 福岡県柳川市稲荷町19

カネキン生花店 内

[福岡県 福岡ショールーム]

〒810-0042 福岡県福岡市中央区赤坂3-8-26

赤坂エクセル 1F

MDC FUKUOKA GALLERY 内

[京都府 京都ショールーム]

〒605-0074 京都市東山区祇園町南側573-2

レイ祇園ビル 1F 京都ぎをん マドンナ 内



◀boku公式HP

[株式会社 丸庄 boku事業部]

〒831-0016 福岡県大川市大字酒見543

Tel. 0944-86-2955

Mail. info@boku-japan.jp

<https://boku-japan.com>



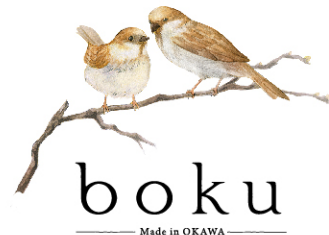


『Side Board 180』 W1800×D400×H850 ¥394,900(税込)

家具をつくりつづけて
気づいたことがある。
ボクらは、
家具だけじゃない、
空間もつくりたいんだ。

福岡県大川市で家具づくりを始めて77年。
ずっと家具をつくりつづけて気づいたことがある。
お客様に届けたいのは、
家具だけじゃない、空間そのものだ。
『大川組子』という伝統技術の美しさを
家具に取り込むことはできないだろうか。
組子の内側から光を照らすことで、
空間を温かく演出できないだろうか。
箱ものと呼ばれる収納家具に細い脚をつけたい。
無垢材の節目を個性として表現したい。
新しいアイデアと職人のこだわりをぶつけ合い、
bokuは、生まれた。やっと生まれた。
デザインコンセプトの『Vernacular Modern』は、
土着型でモダンという意味。
伝統家具とも、高級家具とも違う。
職人がつくる、上質な空間家具。
世界に一つのbokuを、世界に一人のあなたの部屋へ。
ボクらは、今日も明日も、つくりつづける。

職人がつくる、空間家具。





『 Dining Chair 』 W530×D550×H750(SH420) ¥98,450(税込)



『 Living Table 120 』 W1200×D500×H380 ¥198,000(税込)



『 Low Board 180 』 W1800×D400×H430 ¥280,500(税込)

『 Table Light 』 W350×D350×H340 ¥60,500(税込)



『 Pendant Light L 』 W500×D500×H490 ¥77,000(税込)

『 Pendant Light S 』 W350×D350×H340 ¥60,500(税込)



『 Lounge Chair 1P 』 W620×D720×H790(SH420) ¥385,000(税込)



『 Chest 45 』 W450×D400×H1100 ¥203,500(税込)



予想の斜め上をいくアイデアを、
家具職人として
形にしていく仕事は、
最高に難しく、最高に面白い。

同世代のプロダクトデザイナーである久保川はいつも、
予想の斜め上をいくアイデアを持ってきます。
そのアイデアと向き合い、
家具職人として、木材のプロとして、
形にする方法を考え続けるのが、私の仕事。

どのような木取りが適切か。
どの部分を機械で加工し、どの部分は手作業で仕上げるか。
bokuの目指す世界観を大切にしながら、
家具としての機能性や生産現場の効率性も高めていきます。
誰もが納得できる家具を完成させることは
簡単ではありません。
手を動かし、頭を動かし続け、理想を追い求めています。

企画から生産、販売まで自社で完結。
若手主体。様々なプロとの共同作業。
これからの時代の家具づくりのあり方も模索できたら。

最高に難しく、最高に面白い挑戦です。
bokuは、自分の人生に
大きな胸の高鳴りをもたらしてくれました。
家具業界にも、世の中にも、
大きなインパクトを残したいです。

boku 家具職人

松延 琢矢



気づいたら、
九州に移住していた。
職人さんの真横で
デザインに打ち込んだ日々は、
一生の宝もの。

もともと、家具のデザインが専門ではありません。
だけど、bokuのコンセプトを聞き、
大川の家具職人たちの技術の高さを目の当たりにし、
「一緒につくりたい」と強く思ってしまったのです。
気づくと、東京から九州に移住。
職人さんの真横で
デザインに打ち込む日々が始まりました。

「箱ものと呼ばれる収納家具に細い脚をつけたい」
「大川組子のパーツを分解し、照明家具をつくりたい」
青二才のボクの突拍子もないアイデアに
職人さんたちは驚き、戸惑いながらも、
熟練の知恵と技術を重ねていってくれました。

主張しすぎない家具が好まれがちな時代。
bokuには、節の個性も、色も、光も、脚もあります。
でも、その唯一無二の家具に自分らしさを見出し、
自分だけの空間を愉しんでもらえたら。

ここでの家具づくりの経験は、
私の一生の宝ものです。

boku プロダクトデザイナー

久保川 瀬硝



おじさんじゃない。
若い人の心に響く
新しい家具の世界観を
つくりたかった。

スズメを象徴としたbokuのロゴマークは、
私がグラフィックデザイナーとして
初めて手がけた仕事です。
ロゴマークは、ブランドの世界観を体現する重要なもの。
まだ家具のデザインも何一つ定まっていなかったなか、
すべてが手探りの挑戦が始まりました。

ただ、最初から一つだけ決めていたことがあります。
bokuをおじさんのイメージにしないということ。
よく見かける渋い職人家具とは一線を画した
若い人の心に響く新しい家具をつくりたい
という思いだけは揺るぎませんでした。
とはいえ、依頼してくれた社長さんに
このロゴマークを初めて見せたときは驚いていましたね。

家具づくりにおけるグラフィックデザイナーの役割は、
「bokuらしいか、どうか」を判断すること。
この仕事を通して、
異なる視点や能力を持つ人たちがチームを組み、
一つのものをつくり上げる素晴らしさも経験できました。

bokuが大きく羽ばたく日を楽しみにしています。

boku グラフィックデザイナー

箱山 伽野